



子水葱・小菜葱・子菜葱（コナギ）

(公財)日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

ミズアオイ科ミズアオイ属の一年生の夏生抽水～湿生植物。茎は根生し、小さいものでは10cmくらいから、大きくなると地上を這いながら立ち上がり30cm～40cmにもなる。葉の形は変化に富み、線形から、倒披針形、卵形、心形と、成長に伴い形も大きさも変化する。総状花序が葉鞘から伸びる花茎につき、花色は青紫色で、花が葉の高さを超えることはない。

学名を *Monochoria vagina* var. *plantaginea* という。*Monochoria* は「一つが離れた」と言う意味。何が一つ離れているのか。なかなか小さな花で、また、葉の下で咲くことから観察するのは難しいが、咲いた時に雄蕊を観察して欲しい。雄蕊6本の内1本だけ大型で花糸にかぎ状の突起があり、葯の色も紫色である。残りの5本は小さく突起もなく葯の色も黄色。開花した時には、この大型の雄蕊が、突起で雌蕊を確保しながら柱頭へ花粉を受粉させる。子孫を残すためこの *Monochoria* 属の雄蕊に進化したみごとな受精様式である。

日本には稲作とともに渡来したと言われ、万葉人の目にも留まっていたようである。万葉集に『子水葱』として詠まれた相聞歌が3首。小さな子水葱、あるいは子水葱の花を彼女にたとえて、愛の深まりを詠む。

春霞 春日の里の 植子水葱 苗なりといひし 枝は
さしにけむ (大伴駿河麻呂：巻3)

春霞がたつ春日の里に植えた子水葱は、苗だとばかり言っていたけれど、もう枝は伸びて大きくなった

のでしょうね (妻に迎えたのです)

上毛野 伊香保の沼に 植ゑ子水葱 かく恋ひむとや
種求めけむ (巻14)

上野の伊香保の沼に植えた子水葱のようなあの娘よ、私はこんなに恋に苦しむために種を植えたのではないのに。

苗代の 子水葱が花を 衣に摺り なるるまにまに
何(あぜ)か愛(かな)しけ (巻14)

苗代田で育てている小水葱の花を衣にこすり付けたら、着慣れるにつれて(貴女のことが愛おしくなるように)愛しくなってくるのです。

『植え子水葱』と言うごとく、万葉の頃には栽培して食用にしていたようである。しかし食用としての評価は高くはなく、万葉集にこんな歌もある。

醬酢に 蒜搗き合てて 鯛願ふ 我にな見えそ 水葱
の羹 (巻16)

醬酢(ひしおす)にノビルをつきこんだ和え物と鯛を食べたい思っている私に、見せつけないで欲しい、水葱(なぎ:ミズアオイのこと)の吸い物なんかを。

万葉人は子水葱に愛の育みをみたが、現代の我々には厄介ものの害草となっている。除草剤を控えた水田では稲株の間を埋め尽くすまで繁茂してくる。採って食べるにも『羹』には不向きようだ。暑い最中の農作業、せめて、万葉人の愛の育みや *Monochoria* の謂われに思いを馳せて涼をとりたいたいものである。